

# 日本語教師のためのウェブサイト「KC クリップ」

—関西国際センター出版教材・開発サイトのサポートページ作成による教師支援—

西野藍・石井容子・川嶋恵子

## 1. はじめに

「KC クリップ (<http://jfk.jp/clip>)」は、「そのまま見せます！私たちの日本語教育」というキャッチフレーズが示すとおり、国際交流基金関西国際センター（以下 KC）で実際に使用した日本語教育の自作教材やシラバス等を公開するウェブサイトである。KC の実践の成果を、これまで出版した教材と開発したウェブサイトのサポートページの形で公開し、それを日本語教師の支援につなげることを目的に2011年に KC のホームページ (<http://www.jfk.jp/>) 上に開設された<sup>(1)</sup>。公開後も毎年新しいコンテンツを追加する等の更新を重ねているが、KC クリップについてはこれまで田中他 (2013)、石井他 (2012) で触れられているものの、詳しい報告はなされていない。本稿はその概要を紹介し、これまでの反響と評価および今後の展望について報告するものである。

## 2. KC クリップの概要

### 2.1 KC クリップが考える「サポート」

KC では外交官・公務員といった職業人、日本語で研究活動を行う研究者や大学院生、自国で日本語を学ぶ大学生や高校生など、様々な対象に向けた日本語研修を行っている。その実践をもとに一般教材として出版したのが『初級からの日本語スピーチ』や『日本語ドキドキ体験交流活動集』である。また、「日本語でケアナビ (<http://nihongodecarenavi.jp/>)」「アニメ・マンガの日本語 (<http://anime-manga.jp/>)」「NIHONGO e な (<http://nihongo-e-na.com/>)」「まるごと+ (<https://marugotoweb.jp/>)」などのウェブサイト開発・運営も行っている。

各研修では日本語スピーチや発表、地域オリエンテーリングやホームビジット、アニメ・マンガの日本語や日本語学習に役立つウェブサイトの紹介など、一見共通する授業や活動も行っているが、その内容や教材は研修参加者のタイプや研修の目的によって少しずつアレンジされており、各研修に最も適した形で行われている。つまり、研修の数だけバリエーションがあると言える。KC クリップは、このバリエーションに注目し、各研修で作成した教材やシラバスなどを公開することをその基本方針としている。これは、出版教材や開発サイトの使い方を示すだけでなく、教師である各ユーザーに、自分が教えている学習者に合わせて教材をアレン

ジしたり、授業や活動をコーディネートしたりするためのヒントを得てもらいたいと考えているためである。

## 2.2 KC クリップで提供しているもの

KC クリップで公開しているコンテンツには (1) 授業・活動デザインのための資料 (シラバスなど)、(2) 授業で使える教材 (ハンドアウト・スライドなど)、(3) 学習者の成果物や事例、(4) 関連研究・発表の4種がある。これらは上述の出版教材と開発サイトごとに分類されており、トップページの「KCの出版教材・開発サイトに関連した教材例やコースデザインをさがす」にあるそれぞれ



図1 KCクリップのトップページ

のバナーをクリックすると関連するものが探せる。また、これらの資料は全てダウンロードが可能で、書き換え可能なファイル形式のものもある。ユーザーは日本語教室内での使用であれば、オリジナルがKCの提供によるものであることを明記した上で自由にアレンジして使うことができる。2014年11月現在、掲載しているファイル総数は203で、その内訳は(1) 授業・活動デザインのための資料が25、(2) 授業で使える教材が90、(3) 学習者の成果物や事例が24、(4) 関連研究・発表が64である。

トップページには、そのほか「学習者・研修からさがす」というナビゲーションもある。ここからアクセスすれば、「職業人」、「研究者・大学院生」、「大学生」など学習者の属性による切り口から教材を探したり、「外交官・公務員日本語研修」等の具体的な研修名から資料を探したりすることができる。また「研究・発表をみる」というナビゲーションもあり、(4)の関連研究・発表はここからアクセスすることもできる。ここではKCの日本語教育専門員による研究や発表が時系列、出版教材・開発サイトごと、学習者・研修ごとに整理されている。

## 2.3 KC クリップの特徴ー『初級からの日本語スピーチ』を例にー

KC クリップに掲載する資料の方針は「はじめから終わりまで」そして「バリエーション」という言葉で示される。『初級からの日本語スピーチ (以下「スピーチ」)』を例に見てみたい。「スピーチ」のページに掲載している資料の概要は表1の通りである。まず、トップページに出版教材を紹介するスライド (①) がある。これはKCの日本語教育専門員が外部の日本語教育関係者を対象として実施したワークショップで使用したもので、出版教材の概要や使い方

表1 『初級からの日本語スピーチ』掲載資料

①	紹介スライド	出版教材の紹介を含むワークショップのスライド
②	スケジュール・シラバス	出版教材使用時のスケジュール、教師用／学習者用各種シラバス
③	アレンジ例	アレンジして作成した教材（テーマやレベルを変更して作成したもの）
④	フォーマット	アレンジ教材を作成するためのフォーマット
⑤	評価シート	様々なタイプのスピーチ評価シート
⑥	発表会を開くために	プログラムシートやコメントシート、司会表現など
⑦	スピーチの実例	学習者が実際に書いたスピーチの例
⑧	関連研究	論文や発表資料など

が簡潔にまとめられている。より詳しく教材作成の背景や実践の全体について知りたい場合は、関連研究（⑧）を参照することもできる。次に、出版教材を使用してKCで実際に授業を行った際のスケジュールや、学習者や担当講師に配付したシラバス概要（②）があり、具体的なクラス活動を参考にできる。続いて、授業のイメージが得られるように、研修に合わせてアレンジした自作教材の例（③）14種類と、学習者が実際に書いたスピーチ原稿（⑦）がある。さらに、様々なタイプの評価シート（⑤）が6種類掲載されており、評価の方法を考えることができる。また、まとめの活動として発表会を開くための手順や必要な教材等の資料（⑥）があり、そのノウハウも参照することができる。このように「スピーチ」のページでは、日本語スピーチをクラスに取り入れるための基礎知識にはじまり、コーディネートに必要な準備、実施、評価の全ての段階、つまり「はじめから終わりまで」を提供している。この流れに沿うことで授業や活動を行うのに参考となる資料を揃えることができる。

「バリエーション」とは、研修や対象者による違いを指す。2.1で述べた通りKCでは研修参加者や研修の目的に最適となるようアレンジした自作教材を用いている。スピーチの場合、大学生対象のコースでは中上級用にレベルを変える、研究者・大学院生対象のコースでは出版教材にはない「経歴と研究について話す」というテーマに変えるなどしている。KCクリップでは、これらの例を示すとともにユーザーが自身でアレンジ教材を制作できるようフォーマット（④）も提供している。また、シラバスや

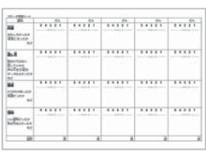


図2 「スピーチ」シラバスのページ

評価方法も研修期間や目的によってそれぞれ異なるため、それらをバリエーションとして公開している。これらの資料を活用することで、各ユーザーは自身の学習者に最適なものを見つけたり、自らアレンジしたりできる。

この二つの特徴は、表2のように整理される。縦が「はじめから終わりまで」、横が「バリエーション」である。縦の流れに沿って活動や授業をコーディネートするのに必要な資料や教材を集め、横のバリエーションを参照して学習者に合わせた教材にアレンジする。KCクリッ

表2 「はじめから終わりまで」と「バリエーション」

<p>研修例 (2)</p>	<p>対象：職業人（外交官・公務員） 期間：8カ月 目的：職務に役立つ日本語を学ぶ  レベル：初級</p>	<p>対象：大学院進学準備生 期間：7ヶ月 目的：日常生活や大学院での研究活動に必要な日本語を学ぶ  レベル：初級</p>	<p>対象：大学生 期間：6週間 目的：日本語を使う、日本文化・社会の確認・発見をする、学習目的や方法を再考する  レベル：初級修了～上級</p>
<p>基礎知識</p>	<p>教材やスピーチによる学習について理解するためのスライド、関連研究</p>		
<p>シラバス</p>	<p>出版教材利用のシラバス</p> 	<p>アレンジ教材用シラバス</p> 	<p>アレンジ教材用シラバス</p> 
<p>教材</p>	<p>出版教材（オリジナル）</p> 	<p>アレンジ教材 「経歴と研究」</p>  <p style="text-align: center;">トピック変更</p>	<p>アレンジ教材 「教育問題」</p>  <p style="text-align: center;">レベル変更</p>
<p>発表・評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表会を開くために 発表会までの準備の流れ、プログラムシート、コメントシート、司会表現など</li> <li>学習者の発表原稿例</li> </ul>		
<p>評価項目：内容・スキル・質疑応答 評価者：教師</p> 	<p>評価項目：スキル・質疑応答 評価者：教師・ピア</p> 	<p>評価項目：内容・スキル 評価者：ピア・（教師コメント）</p> 	

プでは、このようなカスタマイズに必要な資料と視点を提供しているのである。

### 3. 公開後の反響

KCクリップは公開から3年を経たが、サイトはどう評価できるだろうか。開設の目的に照らすと、このサイトを通じて各ユーザーがKCの日本語教育の実践について理解を深められたか、そして出版教材・開発サイトをより活用できるようになったかが評価の観点として考えられる。また、それが日本語教師や日本語教師を目指す人々への支援につながっているのかも大切な点である。公開以来、学会やシンポジウムでの広報、教師対象のセミナーでの紹介を続け、利用者に対する聞き取り調査やセミナー参加者へのアンケートなどの形でユーザーの意見を収集してきたが、そこで得られた反響は以下のようであった。

表3 KCクリップへのコメント

<p><u>KCの日本語教育についての理解</u></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・初級からの専門日本語、体験交流活動型日本語学習など、どんな実践をしている機関なのかわかった。</li><li>・各研修でどんな授業をしているのか、少しだが具体的にイメージができた。</li></ul> <p><u>出版教材・開発サイト活用のサポート</u></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・教材は知っていた/教材を使っているが、他にもこんなに使える資料が提供されていたとは思わなかった。教材と合わせて使いたい。</li><li>・教材紹介のスライドがあると、他の先生にも教材について紹介したり説明したりしやすい。</li><li>・スケジュールやシラバス、成果物の例を見て授業のイメージがわいた。</li><li>・大学院進学予定者のためのスピーチのアレンジ教材がそのまま使えそうだ。</li><li>・アニメ・マンガの授業の活用例がいい。学生からの要望が多いので、ありがたい。</li><li>・司会表現などは、他ではあまり見られない珍しいコンテンツで参考にできる。</li><li>・教材ごとに論文が分かれているのがいい。こういうリストはあまりない。このように整理してもらえると読みやすい。</li><li>・フォーマットがあるのがいい。他サイトでも授業例が参考になるが、編集方法まではなかった。</li><li>・評価シートやフォーマットがアレンジできる形で提供されているのが嬉しい。</li></ul>
---

表3からは、「専門日本語や体験交流活動型日本語学習のイメージができた」という声のように、サイトの利用がKCの日本語教育についての理解につながっていたことがうかがえる。また、「シラバス等から授業がイメージできる」、「論文が参照しやすい」など、出版教材・開発サイトのサポートとしても機能していた。また、スピーチ教材、アニメ・マンガの日本語の授業例など提供している教材がそのまま使える点、アレンジが可能なファイルが提供されている点を評価する声も多かった。これらのコメントから、KCクリップやそのコンテンツは概ね良い評価のもと利用されていると考えられる。

一方、聞き取りを行うなかで課題も見えてきた。それは「もっと早くに知っていたら良かった」の声に代表されるように、より積極的に紹介する機会を設けなければ、出版教材や開発サイトの利用者であっても認知の度合いが低いことである。また、認知されていた場合でも、特に現場経験の少ない日本語教師の場合、ダウンロードしてそのまま使うという利用方法のみを考えていた人が多かったことである。インターネットを通じたリソース提供は有効な教師支援の方法だが、ダウンロードできるコンテンツをいくら揃えても多種多様な現場のニーズにぴたりと合うものを提供することは難しい。むしろそれをベースとして、教師がより少ない労力で自ら教材をアレンジできるようにするほうが活用の可能性も高まるが、この点では個々の教師のカスタマイズ力の育成も重要になることがわかった。

#### 4. KC クリップをより活用するための試み

3で残った課題には、認知度の向上と、学習者に合わせてアレンジする教師のカスタマイズ力育成の二点があった。その課題解決につながる動き、試みとして次のことを行っている。

##### 4.1 潜在的ユーザーに対する認知度向上

出版した教材や開発・運営しているウェブサイトについて、利用者から問い合わせが来ることが多々ある。例えば「アニメ・マンガの日本語」ウェブサイトの問い合わせフォームから、サイトを授業で使いたいと具体的などのように使ったらいいのか、オフライン環境の教室で使いたいのイラストや音声を提供してもらえないか、といったものである。このような問い合わせに対しては、KC クリップの該当ページを示して授業例を参考にしたり授業用の教材を使ってもらったりするよう案内し、KC クリップはそういったニーズにオープンに答えるサイトであることを伝えている。また、学会などでKCの実践について発表した際には、スライド等の資料をKC クリップに掲載するようにしている。サイト上で関連する一連の研究も合わせて示すことでKCの実践についてより詳しく伝わるよう工夫すると同時に、KC クリップの広報につなげているのである。非常に地道ではあるが、今後KC クリップを活用する可能性の高い潜在的ユーザーの認知度向上につなげるべく、このような日々の取り組みを行っている。

##### 4.2 ワークショップ

2013年からは国際交流基金の日本語指導助手としてこれから派遣される人や日本語教員養成課程在籍の大学院生など、比較的経験年数の少ない日本語教師を対象として、KC クリップを

表4 ワークショップの流れ

- |   |  |
|---|--|
| ① | イントロ (30分) : 教材・KC クリップ紹介  |
| ② | 個人作業 (15分) : 自分が日本語スピーチを指導することになったらという想定に必要な資料をKC クリップから探し、実際にフォルダにダウンロードする。 |
| ③ | 全体活動 (30分) : 各自ダウンロードしたものについて、選んだ理由、活用方法など発表。意見交換。                           |
| ④ | ふりかえり (15分)  |

有効に活用するためのワークショップを試みている。2～5名の小グループによるものを、これまで3回実施した。概要は表4の通りで、教材・サイトの紹介と共に、教師がサイトをうまく活用し自分の授業のために教材をアレンジしたり、活動をコーディネートしたりするカスタマイズの視点を得るきっかけとなることを目指している。このワークショップは、何も無いところから教材を作成するのに比べ誰でも作業に取りかかりやすく、また、ダウンロードしたものをもとに短時間でも具体的な意見交換がしやすい。実際に、意見交換やふりかえりを通じて、何をどう使うか、どうカスタマイズできるかといったことにそれぞれが気づきを得ていたことがうかがえた。ワークショップ後の聞き取りにおいても、参加した計10名の全員が「役に立った」と答え、「どんなサイトか、どうやって使ったらいいかがよくわかった」「自分でもアレンジしているいろいろ使えそうだと自信がついた」などの声があった。今後の活用につながるものと期待できる。

## 5. 今後の展望

より多くの日本語教育関係者に KC クリップを利用してもらうためには、4.1のような地道な活動の継続やワークショップの充実を今後も考えていく必要があるだろう。更なる展望としては、利用者層の拡大に向けた対応が考えられる。まず、海外のノンネイティブ日本語教師に向けた取り組みである。本サイトは海外の日本語教師からの反響も大きく、KCクリップを入り口とした KC の研修や出版教材・開発サイトの広報につながる可能性もある。現行のとおりシンプルでわかりやすいサイト作りを心がけるとともに、漢字のルビや英語対応等の検討も必要だと思われる。次に、これから日本語教師として現場へ出る人々に向けた取り組みである。今後はこの層に向けたサポートがさらに求められると考えられるが、学習者や目的に合わせてカスタマイズできる教師の育成に KC クリップを活かすという観点から、経験がなくても活動の様子や実際の流れがイメージできるように写真を入れる、説明を加えるなど、より丁寧なサイト作りを進める。これからも KC クリップの利用者増に向けた努力を続けるとともに、教師を支援していくための工夫を重ねていきたい。

### 〔注〕

<sup>①</sup>2011年の KC ホームページリニューアルに伴い、KC クリップもそれ以前のサイトアドレスからホームページ上に移転した。

<sup>②</sup>ここでは例として3研修を挙げたが、「スピーチ」ページではその他の研修のものも提供している。

〔参考文献〕

- 石井容子・西野藍・川嶋恵子 (2012) 「ウェブ上での情報公開による教師支援の試みー現場に合わせた教材のカスタマイズの実例を通してー」『日本語教育国際研究大会名古屋2012研究発表予稿集』第一分冊、343
- 国際交流基金関西国際センター編 (2004) 『初級からの日本語スピーチー国・文化・社会についてまとめた話をするために』、凡人社
- (2008) 『日本語ドキドキ体験交流活動集』、凡人社
- 田中哲哉・川嶋恵子・前田純子 (2013) 「日本語学習者向けウェブサイトの公開後の継続的なケアー国際交流基金関西国際センターの取り組みー」『国際交流基金日本語教育紀要』第9号、151-157、国際交流基金